香里団地計画における緑地の計画について

——住宅団地を丘陵地に配置するにあたって、その緑地計画について
考慮すべき二三の問題

近 藤 公 夫*

Kimio KONDO*: Planning of the parks and open spaces in Kōri Community

はしがき

日本住宅公団では、大阪府枚方市^{ひらかた}香里にある旧造兵衛敷地を集団住宅地として開発するにあたって、その計画の基本方針についての研究を京都大学建築学教室の西山卯三教授に依頼された。西山研究室では、これを同学の建築・土木・造園の各研究室による共同研究とし、各分野より12名が参加した。そのうち緑地計画については建築学教室の絹谷祐規と造園学教室の中村一及び近藤が担当した。

この団地計画の全般については、次の通り発表済である。特にそのうち緑地計画をとりあげて、本誌に紹介するに当つては、日本住宅公団及び西山研究室の了解を得た。

西山卯三・絹谷祐規：大規模住宅団地の開発〔建築と社会 第37輯 第7号 1956.7. 日本建築協会〕

団地の性格と開発の基本方針

予定地の性格を検討した結果、次の方針がたてられた大半が丘陵地形なので、景観の変化に富むことは利点であるが、その過半が傾斜 10° 以上の斜面で、平坦地に乏しく宅地の造成に困難である。又その位置は、大阪市の都心から比較的近い(20km)が、現在は交通機関が不便なので、宅地を開発しても、入居者の大部を占めるとおもわれる大阪都心への通勤者に対する魅力を欠くことが考えられ、経営上困難をきたすことになるかもしれない。しかし、電車やバスの路線を新設して交通問題を解決し、又その地形を利用して、景観や緑地施設等の面で他の大阪市周辺住宅地より勝れた居住環境をつくることにより、その経営を成功させ得る可能性もあるであろう。

緑地計画の方針

上の結論から緑地の計画は、良好な居住環境を作るために、変化ある地形を利用して完備した緑地を設置するとの構想に基いて行つた。

○ 団地内部の緑地は、日常居住者が緑地に対して持つ要求を完全に満たすため、普通公園・運動公園・小公園(児童公園)・幼児遊園の4系統をとり入れる。但しこのため緑地の面積が団地内でかなりの部分を占め、結果的に宅地を圧迫することとなる。従つて、ここでは、宅地利用には困難だが、遊戯場としては施設の設置等に利用できる様な傾斜面を、緑地に開発すること、を問題解決の方針とした。(1,2図参照)

破線は団地の主要道路を示す。等高線間隔は10m

1.京阪電車香里園駅に至る。2.京阪電車枚方公園駅に至る。3.国鉄星田駅に至る。

○ 団地の周辺に大休養緑地があると、団地の魅力も増す。ここでは緑地計画の方針として、枚方遊園や成田不動尊附近の丘陵に、面積100ha級の大阪府立自然公園を誘致し、団地住民もこれを容易に利用し得る様に、その区域を計画することを考慮した。

○ 上記自然公園はその区域計画によると、一部が団地に楔入する形をとるが、この部分は団地住民の利用に便利なので、面積の点で団地内には設け難い様な普通公園の機能をもたせるべく、野外劇場等を計画した。

* 京都大学農学部造園学研究室；Fac. Agr., Kyoto Univ.

1 普通公園 2 運動場 3 小公園 4 造園指導園
5 大阪府立自然公園

1 プレイ・スカル
プチユア
2 ジャンゲルジム
3 すべり台
4 遊歩道
5 中層住宅
6 分譲宅地

○ 予定地に平地が乏しい関係上、運動場のような動的休養の場が不足しやすい。このため、学校運動場を、放課後等に一般住民に解放するといった二元的利用を、配置・施設・管理等の計画方針とした。特に団地中央に当る高等学校の運動場は、団地のスポーツセンターとして競技場・野球場・体育館等を含ましめる。

○ 住民の日常生活と最も関係の深い幼児・少年の緑地を、小公園として数多く設け、公園間隔をちぎめて利用の便を図った。又この公園が分区の中心になるよう、集

会所・幼稚園等をその周囲に集中せしめ、特に幼稚園職員による公園管理と利用者指導を考慮した。

○ 幼稚園以前の幼児は、自宅の近くで遊ぶ場所を必要とするため小遊園を多く設けることとした。たゞ遊園が小規模すぎると魅力に乏しくなるので、遊園・公園が連なつて一連の緑地をなす様に考えた。

○ その他、団地には未利用で残された空地が方々に散在するが、その合計面積はかなり大きく、活用によつては団地の居住環境を向上せしめる余地を残している。この事実注目して、住民をこのような緑地開発に協力する様、啓発するため、団地に苗圃等を持つ造園・園芸の指導園をおき、これを指導機関兼緑地管理機関となる様に計画した。

以上の緑地系統を表示すれば次の通りである。但し緑地の面積は、団地の人口構成を一般都市におけると同様に考えた結果である。

緑地名	(ha) 基準面積	箇数	(ha) 面積	(m) 誘致距離	(註)
幼児遊園	(0.05)		3	50	※ 1
小公園	0.2~0.4	20	6	200	※ 2
運動公園		4	6	800	
普通公園		2	20	800	

全敷地面積 100ha

※ 1 () 内は仮基準としたものを示す。

※ 2 公園内設置の幼稚園面積を除く。

〔参考〕この住宅団地の構成のあらましは次の通りである。

○ 予定入居戸数5,494戸 入居人数 21,976人(一戸平均 4人)

○ 内訳(戸数) 高層共同住宅1,400 中層共同住宅406
ポイントハウス1,656 テラスハウス1,338 分譲住宅 694

○ 総面積 408,000坪

尚この団地は昭和35年完成の予定である。

(昭和31年度春季大会発表)

造園雑誌編集委員会(昭和30・31年度)

委員長; 池ノ上 容

委員; 池原謙一郎

北村信正

福富久夫

宇野 佐*

北村文雄

本間 啓

大井道夫

鈴木忠義

前野淳一郎*

小沢知雄

田中正大

三好勝彦

加藤雅太郎

新田伸三

吉川 需

川本昭雄

平野侃三

(* 幹事)